奈良・上之宮遺跡

1 所在地　奈良県桜井市大字上之宮小字井田
2 調査期間　一九九〇年（平2）二月～四月
3 発掘機関　桜井市文化財協会
4 調査担当者　清水眞一
5 遺跡の種類　居館跡
6 遺跡の年代　六～七世紀
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

上之宮遺跡は、桜井市の中心・桜井駅から南方約一・五km、寺川の左岸河岸段丘上に位置している。飛鳥から山田道を経て東国へぬける街道筋に位置し、メスリ山古墳の北二〇〇m、艸墓古墳の東一五〇mにあたる。遺跡の立地は、南・北・西がふさがれた地形で、東は寺川（『万葉集』にみえる倉椅川）に面し、対岸にやや広い平野を持つ。寺川に舌状に伸びる花崗岩風化土の上に、東西約六〇～七〇m・南北約一〇〇mの範囲で、掘立柱建物・柵・石溝・素掘溝等が作られており、飛鳥時代初頭の居館遺構を構成している。海抜高は約一〇〇mである。

（桜井・吉野山）

上之宮遺跡の発掘調査は、桜井南部特定土地区画整理事業にともなうもので、一九八六年一一月から試掘調査を開始し、遺構群の検出にともない、今まで五次にわたる調査を実施した。

第五次調査の結果、四面庇付大型建物の西二〇mの、やや傾斜した低地から、直径六mの半円形の石溝が検出され、石溝に囲まれた内側から、長さ二・六m、幅一・五m、深さ一・五mの方形の石積み遺構が発見された。この方形石積み遺構の低い側（北東部）からは、排水溝状の石溝が北東側にのび、第一次調査で検出していた石溝につながることがわかった。つまり、半円形の外護状石溝をともなう方形石積み遺構があり、その排水溝が約五〇m北まで伸びていたわけで、まさに園池遺構と呼ぶべき特殊な庭園が作られていたといえる。すなわち、上之宮遺跡の六世紀末～七世紀初頭期には、主殿とみられる四面庇付大型掘立柱建物、脇殿とみられる東西棟の長廊建物、そして庭園遺構・祭祀遺構、それらを取り囲む柵列や門状遺構がそろっており、格式の上からも、規模・構造の上からも、貴族の邸宅としておかしくないと考えられる。

出土遺物の量は多く、整理用コンテナに約一五〇箱ほど出ている。内容的には須恵器・土師器が大半を占めるが、石積み遺構や石溝か

ら木片・木製品も数多く出土した。主なものに、横櫛・糸巻・斎串形・琴柱形・刀子形・鳥形等の木製品、ベッコウ片等とともに、松明とみられる焦げつきの残る棒状製品が多い。また、遺跡全体から桃核が出土しており、クルミ・クリ・ウメ・ウリ・コメ・ヒョウタン等の食用植物の核・皮等が石積み遺構や石溝から出土している。園池遺構埋没後に、多量の土器がその上に棄てられているが、その中には、ガラス玉鋳型・ルツボ・ガラス滓があり、付近にガラス工房のあったことが推定できる。

8　木簡の釈文・内容

(1)　別□〔金カ〕塗銀□其項□頭刀十口　091

木簡は、石積み遺構内の、底より二〇㎝までの泥をすべて持ち帰り、水洗した結果、八片に別れた状態で検出した。奈良国立文化財研究所の橋本義則氏により、すべて接合することが判明した。一二文字のうち三文字が解読しにくいが、二番目は「金」かとみられる。木簡は、明らかに削り取った破片で、この左右にも文章が存在したことは、両側に墨痕がみられることからも推定できる。おそらく、前に何かの文章、たとえば刀に関する文章があり、それにひきつづいて「別に、金塗銀纏(?)で、其頂(?)が□頭の刀を十本」等の意味を持つ木簡ではなかろうか。全長一八三㎜・幅一八㎜・厚み二㎜である。

なお、木簡釈文は、京都教育大学和田萃氏の釈読に、補足させていただいた。

9　関係文献

桜井市文化財協会『上之宮遺跡第五次調査概報』(一九九〇年)

(清水眞一)